

河北潟流域新聞



第8号

発行：NPO法人河北潟湖沼研究所 2025年3月



こなん水辺公園にいたアオサギ。下のくちばしにプラスチックカップが刺さり、口を閉じられなくなっていた。(2024年9月29日)



河北潟干拓地正面堤防の様子。2024年1月の地震により堤防が沈下し、復旧工事がすすめられているが、湖岸にごみが打ち寄せられ散乱している。(2025年1月26日)



内灘町権現森海水浴場付近でのごみ拾い活動。(2025年1月26日)



河北潟東部承水路では樋門付近にごみがたまりやすい。(2025年1月13日)

河北潟周辺のごみの在りか、ごみの行方、ごみ拾いの意味

目次

- 2 河北潟周辺のごみの行方 ごみはどう処理される？
- 4-5 参加しよう！河北潟流域のごみ拾い
- 6-7 ふるさと河北潟流域をめぐる1 大崎（かほく市）
- 8 河北潟流域で活動する人のお話 12
～豊かな自然、美しい風景のある河北潟を守りたい～
河北潟クリーン作戦実行委員会 川原奈苗さん

河北潟周辺にはたくさん
の不法投棄ごみがあります。
くちばしにプラスチック
カップが刺さったアオサギは、
動きにくそうに草陰に隠れて
いました。アオサギがいた公
園周辺はポイ捨てごみがとて
も多く、エサを取ろうとした
時に誤って刺さったものと思
われます。

河北潟干拓地正面堤防付
近は、ごみ拾いが継続して行
われ、ごみが減少傾向にあ
りました。最近再びごみ
が目立つようになってしまし
た。古いごみも目立ちます。
長い間沈んでいたものが地震
や大雨で浮かび上がってきた
と思われる。不法投棄さ
れたごみは長い間自然界を漂
い、生物にも影響を与えま
す。ごみの無いよりよい地域
にするため、考え、行動して
いくことが必要です。

河北潟周辺のごみの行方

ごみはどう処理される？

河北潟周辺のごみはどのように処理されるのでしょうか。今回はそのなかでも河北郡市（かほく市、津幡町、内灘町）で出たごみの行方について紹介します。河北郡市で出たごみは河北郡市広域事務組合が管理する「河北郡市クリーンセンター」「河北郡市リサイクルプラザ」に運ばれます。河北潟東部承水路のすぐそばにある施設です。燃えるごみはクリーンセンターで焼却され、燃えないごみはリサイクルプラザで選別後、リサイクルできるものはリサイクルされます。リサイクルできない燃えないごみや、燃えるごみの焼却後の灰は、津幡町助谷にある最終処分場に運ばれ、埋め立てられます。



河北郡市クリーンセンター

クリーンセンター

「河北郡市クリーンセンター」は、最近施設の建て替えが完了し、2023年4月から新しい施設が本格稼働しました。クリーンセンターには、収集されたごみが運ばれてくるほか、河北郡市在住の方は直接ごみを搬入することもできます。

建て替え以前の施設では、集められたごみのうち、燃えるごみは乾燥後、固形燃料（RDF: Refuse Derived Fuel・廃棄物からできた燃料）化されて、志賀町にある石川北部RDFセンターという専用の焼却施設で、発電するための燃料として使われていました。ここでは河北郡市以北の能登地域のRDFが焼却されていますが、老朽化により使用できなくなったため、施設を新しくして、河北郡市クリーンセンターでのごみ処理をより効率的に行えるようにしました。

焼却熱を利用

新しくなったクリーンセンターでは、同じ施設内でごみの焼却から発電まで行えるようになりました。ごみを燃やした時の熱によつて発生させた蒸気を利用して発電しています。現在、施設で使われている電気は、ほとんどがクリーンセンターで発電

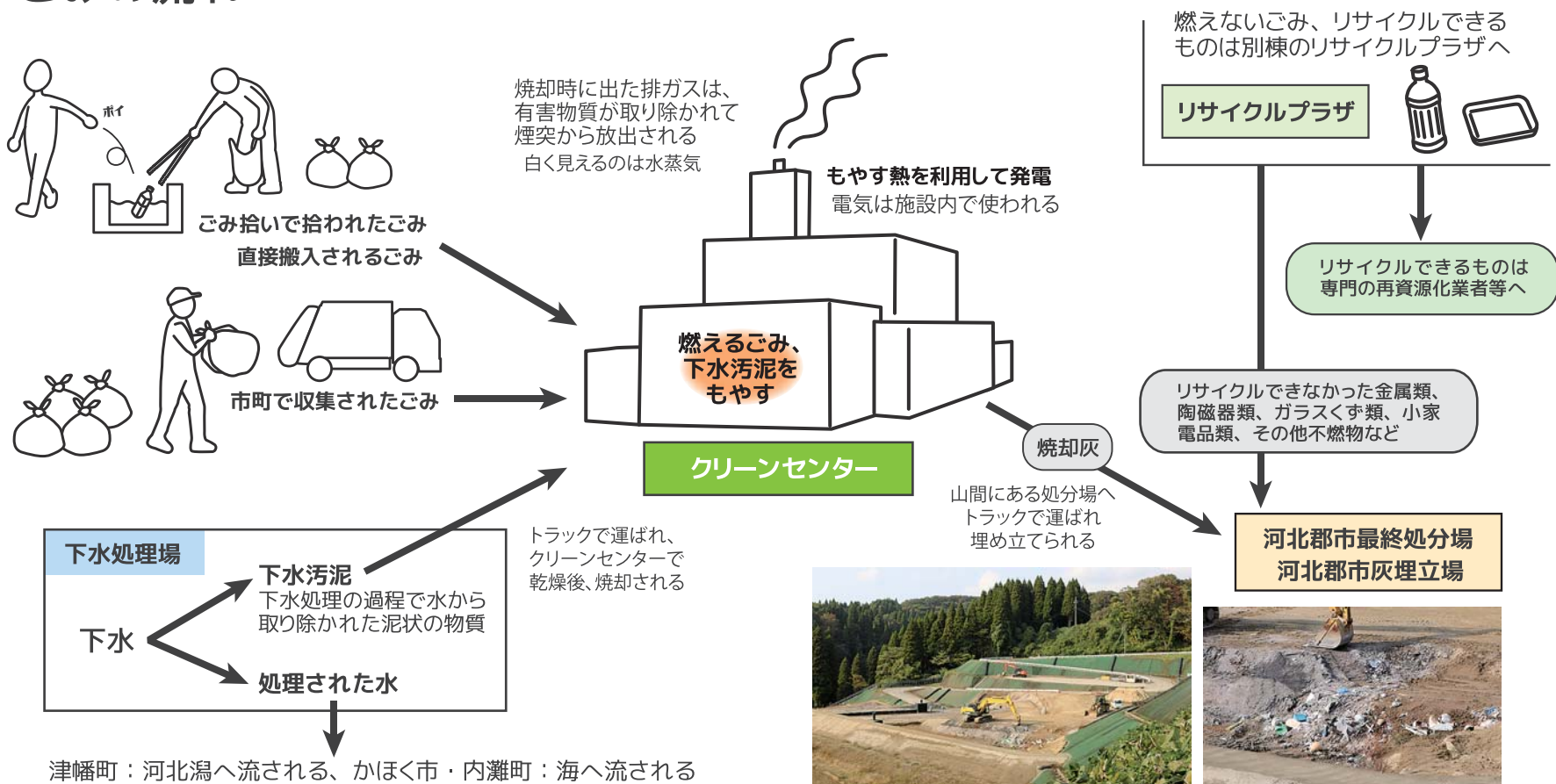
されたもので賄われており、余った電気は市役所等へ売電しています。

またクリーンセンターでは、燃えるごみと一緒に下水汚泥も燃やしています。下水汚泥は下水処理場で処理されたものがトラックで運ばれてきますが、そのままでは水分量が約80%あるため、ごみの焼却熱を利用して事前に乾燥されます。他の燃えるごみと同程度の発熱量（カロリー）にしてから、燃えるごみと一緒に燃やされます。河北郡市で出た下水汚泥はすべてここで燃やされていて、燃やされているもののうち、一般のごみが80%、下水汚泥が20%という割合です。

地場産業のごみ

かほく市は地場産業として繊維産業がさかんです。このため繊維のごみが多いという特徴があります。繊維くずは本来産業廃棄物ですが、クリーンセンターの整備を機に、一般廃棄物と併せて処理する「併せ産業廃棄物」として受け入れています。繊維くずは高カロリーなごみで、繊維くずばかりを燃やすと高温になりすぎて、焼却炉を傷めてしまいます。このため高温になりすぎないように一般廃棄物と混ぜあわせて、燃やしています。

ごみの流れ



ごみの量は？

2023年度は、一年間で燃えるごみが31,057トン、燃えないごみが3,864トン搬入されました。

かほく市、津幡町、内灘町では2023年7月には豪雨被害が、2024年1月1日には能登半島地震により大きな被害を受けた地域があります。これにより2023年度は災害ごみの直接持ち込みが増え、特に燃えないごみの直接持ち込みが前年度より600トン近く増えました。

ごみ拾いで拾われたごみは？

ごみ拾いで集められたごみは、選別後リサイクルできるものはリサイクルされますが、汚れがひどいものは、燃やせるものは燃やして残りは処分場行きとなります。河北潟周辺のポイ捨てごみはペットボトルがとても多く、本来リサイクルできるはずのものがたくさんありますが、ポイ捨てされるとできなくなります。

困ったリチウムイオン電池

ごみ処理で困っている事として、「リチウムイオン電池」の問題が一番に挙げられます。スマートフォンやノートパソコン、モバイルバッテリーや家庭用ゲーム機等、いろいろな製品に入っているものですが、リチウムイオン電池は圧縮した時に発火します。このため燃えるごみに入っていると、ピット火災の原因になります。リチウムイオン電池ばかりが原因ではないようですが、ごみから火が出ることは日常的に起こっています。現在のごみピットには火を感じするシステムがあり、火を感じすると放水銃で自動的に水がかけられるようになっていきます。ごみピットでは火災が大きくなるとなかなか消火できません。分別の徹底が求められています。

ごみの減量化を

今回、記事の作成にあたり、河北郡市広域事務組合の上野谷剛さんにお話を伺いました。さいごに、上野谷さんに流域の皆様にご期待することをお聞きしました。

「ごみの減量化です。ごみを見ていると、食品の食べ残し、未開封の食品、未使用の物が本当にたくさんあります。例えば食品を買いに行くときには冷蔵庫の中身を把握してから行く、物を買うときは買う段階で必要なものかしっかり考える等、買う段階で気を付けていただければと思います。それから紙資源は重量があり、これをきちんと分別すると大きな減量ができます。ぜひ分別、リサイクルへの協力をお願いします。」

ごみを適切に処理することはもちろん、ごみを出さないようにすることも大切です。



ごみピットへごみを投入するプラットフォーム



高力ローリーごみ破砕機



ごみピットとごみクレーン。プラットフォームから投入されたごみをクレーンで持ち上げ、落として攪拌する。



資源ごみの経路

計画収集、常設拠点、直接持ち込み、集団回収

ごみの出し方いろいろ

ふだん決められた曜日出されるごみの収集は計画収集と呼ばれると思います。燃えるごみについてはほとんどの方が計画収集時に出されていると思いますが、資源ごみについてはリサイクルステーション等に持ち込んだことがある方も多いのではないのでしょうか。

河北郡市のうち津幡町や内灘町には、津幡町役場のつばたRecyclingや内灘町役場の常設リサイクルステーションなど、町の住民が資源ごみをいつでも持ち込むことができる常設拠点がありません。住民にとっては便利であり、またリサイクル率も高くなるといった良い面があります。

一方で常設拠点への持ち込みが増えることで別の影響もあります。計画収集に対して常設拠点への個々の持ち込みは、トータルで資源ごみの運搬に多くの燃料が使われることになり、せっかくリサイクルにより資源を節約しても、別の資源が消費されてしまいます。

河北郡市の場合、資源ごみはリサイクルプラザで選別、処理された後、ビンや金属くず、ペットボトル、容器包装プラスチック等、種類ごとに、それぞれ専門の再資源化業者へ引き取られます。常設拠点に持ち込まれた資源ごみも、業者等へ引き取られることに

なりますが、容器包装プラスチックはそのままの状態を出すことはできず、選別や圧縮・結束といった作業が必要です。この作業はリサイクルプラザでしかできないため、常設拠点からいったんリサイクルプラザへ運ばれます。計画収集ではこういった作業を平準化して行うことができますが、常設拠点から運ばれる資源ごみは、まとまった量で持ち込まれることもあり、作業員の作業量に偏りが出ることもあります。

資源ごみのリサイクルが増えることはよい事ですが、そればかりではなく様々な角度から見て全体でより合理的な仕組みを考える必要があります。

集団回収について

以前から自治会や学校等で資源ごみを回収する集団回収は年々減少傾向にありました。2020年、新型コロナウイルス感染症が広がる中、多くの集団回収が中止され、収束後もそのまま再開されないところがあります。集団回収では新聞や雑誌など紙類が多く、重量もあることから、資源ごみの回収量としては無視できないものです。実施の負担があるといった面もありますが、環境教育や地域コミュニティ活動の強化といった良い面もあります。集団回収の意義の見直しを期待されます。

取材協力

上野谷剛（河北郡市広域事務組合）
山本正樹（マサコンサルティング株式会社）

参加しよう！河北潟流域のごみ拾い

河北潟周辺ではさまざまなごみ拾い活動が行われています。活動を紹介するとともに、ごみ拾いをするときの注意事項やごみ拾い活動の実施方法などを紹介します。

ごみ拾い活動をする意味とは？

なぜごみ拾い活動をするのか？ ごみ拾いを実施する意味をあげてみます。

● 環境・生態系保全

自然界からゴミが減り、自然環境やそこに住む生物が守られる効果があります。マイクロプラスチックなど人への影響があるごみも減らすことができます。

● 地域を大切に思う・まちづくりの基盤ができる

みんなでごみ拾いを行うことで、参加者間でのコミュニティができます。また同じ場でごみ拾いをする事で、地域の現況を同時に確認できます。これにより地域をどうしていくか、話し合う共通基盤ができます。

● 地域の自然を身近に感じられる

普段人があまり近付かない場所にごみが多くみられます。ごみ拾い活動では、近くにあっても普段はあまり行かない場所、湖岸や川岸、海岸等に近付いていくことになります。ごみ拾い活動が行われることで自然を間近に見られ、その魅力や過去との違い、危機的な状況など、さまざまに感じることができます。

● 地域経済の中での効果

ほとんどのごみは、元は商品です。地域社会の中で消費者はさまざまな商品を購入し、使う責任としてごみ拾い活動を行います。ごみ拾いをしていて、さまざまなメーカー名、商品名が入ったごみを拾います。ごみ拾いを行う事は、作る責任をもつ生産者と、使う責任をもつ消費者に、ごみ削減に向けた呼びかけを行うことになります。

● 安全な地域づくりにつながる

ごみが散乱している場所は、ごみ自体が危険物である場合もあるほか、治安の悪化につながることから、犯罪が起こりやすくなる可能性があります。ごみのない状態を作ることで、安全な地域づくりにつながります。

● 結果が見えやすい・達成感がある

多くの環境保全活動は結果が出るまで時間がかかり、また結果が見えにくいものです。しかしごみ拾いは拾った分だけ確実にごみが減り、その成果が目に見えます。やりがいや達成感を得やすく、こういった活動が初めての方でも参加しやすく、さまざまな環境保全活動や地域活動の入り口となります。

河北潟流域ごみ拾いラリー

河北潟流域の各地で行われているごみ拾い活動に参加すると各回でスタンプが1個たまるものです。2024年から開始しました。スタンプを6個集めると記念品がもらえます。河北潟湖沼研究所が各地で実施するごみ拾い活動で配布しています。湖岸、海岸、水路など、いろいろな場所でのごみ拾いに参加すると、各地の環境やごみの量や内容、状態の違いなども垣間見ることができます。2024年はカヌー体験も兼ねたごみ拾い、一日で河北潟の湖岸、河北潟干拓地、海岸をまわるごみ拾いツアー等を実施しました。活動案内は河北潟湖沼研究所のホームページやSNS等で行っています。

※河北潟流域ごみ拾いラリー（河北潟湖沼研究所ホームページ内）
<https://kahokugata.sakura.ne.jp/activity/gomi.html>

〇活用ください 河北潟流域でごみ拾い活動をしている団体様にはスタンプカードをお渡しできます。ご希望の場合お知らせください。また「ここにゴミがたまっている」「ここでいっしょにごみ拾い活動しましょう」といったご提案や情報お待ちしております。



背景の地図 ● 河北潟流域ゴミ拾いラリー実施場所 ● 河北潟クリーン/作戦実施場所



森下川河口での河北潟カヌー体験・カヌーでごみ拾い（2024年8月25日）。参加者29人、16kgのごみを回収。（実施協力：河北潟カヌークラブ）



記念品とスタンプカード



河北潟流域ツアー耐寒ゴミ拾いラリー（2025年1月26日）。一日で河北潟干拓地の湖岸、権現森海水浴場、宇ノ気川河口のミカ所でごみ拾いを行い、24人で合計370kgのごみを回収。また数えられただけでも475本のペットボトルを回収。

*河北潟流域ゴミ拾いラリーの実施にあたり、エフピコ環境基金の助成金を活用しています。

河北潟クリーン作戦

毎年4月に河北潟の湖岸の複数地点で行われている一斉清掃活動です。1995年から毎年開催されています。近年は湖岸の草木が伸びる前の4月の第3日曜日の9時～10時に開催しています。2024年は全9地点で実施され、840名が参加し、全体で約4.3トンのごみが回収されました。拾ったごみのうちペットボトルの本数を数えたところ、全体で3400本以上のペットボトルが拾われました。

〇参加の仕方

【個人】当日、各実施地点に受付が設置されるので、そこで受付することで参加できます。どの地点でもご参加いただけます。

【団体】企業や学校等の団体参加も可能です。団体参加の場合は事前申込ができますので、事前申し込みをすると当日スムーズに参加できます。

〇実施案内 毎年3月にホームページやチラシで実施案内が出されます。団体の事前申し込みについてもご案内しています。

※河北潟クリーン作戦実行委員会ホームページ
<https://sites.google.com/kahokugatalake.com/kahokugata-clean/>

*独立行政法人環境再生保全機構地球環境基金企業協働プロジェクト（LOVE BLUE 助成）およびエフピコ環境基金の助成金を活用しています。



グリーン・ビーチいしかわ



グリーン・ビーチいしかわ in はくさん（2024年5月25日）。白山市徳光海岸で開催。参加者800人、2.87トンのごみを回収。



ビーサン跳ばし世界選手権 in 金沢 2024（2024年9月29日）。金沢市金石海岸で開催。清掃参加者245人、0.15トンのごみを回収。

（写真：グリーン・ビーチいしかわ実行委員会より）

グリーン・ビーチいしかわ 運動の目標

- ①美しい石川の渚を取り戻し、白砂青松を蘇らせる基盤づくり
- ②野鳥や海の生き物を深刻な被害から守る海の環境・ルールづくり
- ③沿岸漁業資源の回復に良好な豊かな海づくり
- ④森林・河川を守る基盤づくり

石川の海岸線 583 km をきれいにする海岸愛護運動「グリーン・ビーチいしかわ」は、1995年から展開され、毎年たくさんのボランティアが参加しています。エフエム石川が提唱し、関係機関や団体とともに95年1月に実行委員会を設立しました。当初は海に面した8市17町でスタートしましたが、自然生態系を構成する山～川～海をつなぐ全県一斉の運動が不可欠だとして、2年目の96年からは41市町村参加の「県民運動」になり、現在に至っています（市町村合併により現在では11市8町）。2024年は50,501人が参加しました。2025年で活動31年目になります。

春の「グリーン・ビーチいしかわスタートデー」として「グリーン・ビーチいしかわinかなざわ」をはじめとする海岸清掃を行うとともに、ラジオ放送を通じた海岸清掃の日程広報、参加の呼びかけ、漂流物展の開催等の啓発活動を展開しています。秋にはビーサン跳ばし世界選手権in金沢、稚魚の放流なども実施しています。

※実施日や場所等はホームページでご覧いただけます。
グリーン・ビーチいしかわ <https://www.cleanbeachishikawa.com/>

ごみ拾いで気を付けること ～安全に、事故を起こさない～

慣れない場所でのごみ拾いでは、思わぬ危険に遭遇することがあります。また慣れている場所であっても、ごみ拾いに夢中になってしまうと、通行する車や人、側溝などに気が付かず、事故につながる危険が高くなります。服装や道具、実施場所の状況や天候などを確認し、安全に気をつけながら参加しましょう。

気を付けるポイント

1. 素手でごみを拾わない・・・軍手やトングを利用する
2. 足もと、周囲の状況に気を付ける・・・思わぬところに石や穴、ガラスの破片、突き立った切り株や危険なごみがあることも
3. 無理をしない・・・大型のごみや危険物を無理に回収しようとしない
4. 単独行動を避ける・・・周りに人がいないところでは、転落したりケガをして動けなくなったりしても気付かれない危険がある

ごみ拾いでこんな事故も

河北潟の湖岸のごみ拾いでは、過去に以下のような事故も起きています。

▼水路に転落・・・水路の側でごみ拾いをしていたら、草で隠れていた水路に気が付かず、水路に転落した。

▼落ちていた釘が足裏に刺さる・・・落ちていた板から飛び出している釘に気が付かず、踏んでしまい、釘が靴と足を貫通した。

▼橋げたで頭部打撲・・・橋の下で屈んでごみ拾いをしていたところ、頭上にある橋げたに気が付かず、体を起こした時に頭をぶつけた。

自分達でごみ拾い活動をするには？

身近な場所にポイ捨てごみが多い、自分達でもごみ拾い活動をしたい、という場合、地元の町会や市民団体などで、ごみ拾い活動を実施することもできます。実施場所の自治体に連絡すると、ごみ袋やごみの分別方法、ごみの回収などについて教えてもらえます。河北潟周辺の2市2町の場合は右ようになります。

拾ったごみはできるだけ分別を

拾ったごみは、できる限り分別しましょう。燃える、燃えないで分け、燃えないごみのうち、びん、空き缶、陶器、金属、電球などはそれぞれ分けます。また危険物（ライターやスプレーなど）も収集する方にわかりやすいように分けましょう。さいごにごみ袋の口を結び、重いものを周囲に置くなどして、集めたごみが風で散乱しないようにしましょう。

金沢市	ごみ減量推進課	実施場所とごみの集積場所を連絡する。集積場所が公園などの場合は、主催者が事前に管理者に了解をとること。ごみは後日回収される。ボランティア清掃用のごみ袋提供あり、中身が見える半透明袋であれば持参したごみ袋も可。トングや軍手の貸し出しあり。
かほく市	防災環境対策課	実施場所とごみの集積場所を連絡し、活動の手続きをする。ごみは後日回収される。ボランティア清掃用のごみ袋提供あり。軍手の貸し出しあり。
内灘町	地域産業振興課（海岸清掃）	実施場所とごみの集積場所を連絡する。ごみは後日回収される。場所によっては集積場所が町から指定される。ボランティア清掃用のごみ袋提供あり。
津幡町	※一般団体のごみ拾い活動について、ごみの回収等は行っていない。	

※情報は2025年3月時点のものです。変更される場合もありますので、活動実施をご検討の場合はその都度各自治体へご確認ください。

ふるさと 河北潟流域をめぐる

大崎（かほく市）



大崎はかほく市のなかでも南に位置し、内灘町と隣接しています。世帯数は761、人口は1959人（令和6年3月31日現在、『統計でみるかほく市2024』より）です。東側は河北潟西部承水路に、西側は日本海に接しています。2024年能登半島地震では、液化化による大きな被害があった地域です。大崎の昔の暮らしや河北潟とのかかわり、自然、そして地震被害からの復興等について、大崎区の松原さん、山名田さん、野田さん、長原さんにお話を伺いました。



大崎 国土地理院撮影の空中写真（左は1961-1969年撮影、右は2012年撮影）



松原秋夫さん（昭和21年生まれ） 山名田勇一さん（昭和27年生まれ） 野田稔彦さん（昭和32年生まれ） 長原克信さん（昭和34年生まれ）

河北潟干拓前後の暮らし

河北潟干拓が始まる前、大崎では海や河北潟で漁業に従事する人がたくさんいました。テント船に乗って九州から北海道までイワシ漁に従事する人もいました。テント船とは昔からのイワシ刺し網船のことです。板船に帆が付いており、風のない時は出漁するのに帆を巻き上げ、櫓を漕ぐ帆船です。

夏場は近海でもイワシがたくさん獲れ、浜で炊き上げて干したものを食料ではなく肥料として里の方の田んぼに出荷していました。冬の河北潟漁ではフナやボラなどが獲れました。

松原「私の親も漁師で、冬は河北潟の漁、夏はテント船に乗って、イワシ刺し網漁をしていた。イワシを追いかけて寒い時は九州まで行き、暖かくなると魚が北上がり最後は北海道まで行っていた。網元が10軒ほどあり、そこへ雇われて行っていた。」
山名田「私の家は祖父が潟で漁をしていた、父は日本海で漁をしていた。私が小学校3、4年生頃までは河北潟で漁をしていた。」

昭和31年には河北台灌漑用水幹線水路の造成工事が始まり、大崎地内の河北潟を水源に、大崎から宇野気、七塚、高松までの農地に水が供給されるようになりました。それから砂丘地でも畑ができるようになりました。昭和30年代は、葉タバコの栽培が盛んでした。

漁業から繊維業へ

魚をとったり農作物を収穫したりする人と、売りに行く人、家族内で分担し生計を立てていました。市場や漁業組合に出荷する方法もありましたが、自分たち

で街中や里山へ売りに行った方がより高く売れました。当時は大崎と津幡町川尻をつなぐ渡し舟（駄賃船）や、内日角から浅野川をさかのぼり、蚊爪まで行く舟もありました。5、6人ほど乗れる舟でした。松原「用水がない時は父が桃を作っていた。金沢の市場に出しても安いから、津幡から国鉄で富山県の高岡まで出荷していた。桃はカメモシがつくとへこみができて商品にならなくなるから、それを食べさせてもらっていた。」

山名田「明治生まれの祖母は、夫がとってきたものを天秤棒にかけて、津幡や高松の山手の方に売りに行っていた。」

昭和34年から35年にかけて、日本海のイワシが不漁となり、漁業をやめ繊維工場を始めたり、金沢へ勤めに出たりする人が増えました。同時期、ちょうど河北潟干拓事業も始まり、河北潟での漁業権も放棄することとなりました。

松原「昔は魚のテグスなんかはないし、馬のしっぽで輪を作って罾を作っていた。そこにエサをまいておくと鳥が首を突っ込む、そうして鳥をとっていた。精米を出たくず米をもってきてばらまいておく。そうしたらツグミ、スズメ、ハトがかかった。それをつかんで皮をむいて、骨がいつぱいあるもんで、開いて骨を金槌で叩いて砕いて、焼いて醤油をつけるとおいしかった。食べるものがなかったから、よくそんなことをしていた。河北潟でとったフナは醤油で炊いて食べていた。皆生臭いと思うみたいだが、自分はそんなに生臭いとは思っていなかった。そんなものしか食べられなかったから。フナとボラの小さいもの、私たちはイシゴイやアカメと言っていたが、そういったものやエビとかアメグリもよく食べていた。」

河北潟と食べもの

干拓前の河北潟では汽水域にすむ魚も多く、この時代を知る人は河北潟でとったものを食べた経験をしています。ちいさなスズキをハネと呼びますが、昔の河北潟にはハネがたくさんいました。イシダイ、クロダイやカレイ、カワギスなどもいました。またいろいろな魚や鳥の卵、ヒシの実などをとって食べていました。

松原「ハネは白身の魚でやわらかくておいしかった。ちよつと生臭いけど食べ方によつてはおいしい。」

野田「肉食の魚はうまい。ハネは煮つけやったね。」

山名田「子どもの頃はヒシをとって食べた、鳥の卵を探したりするのが好きだった。鳥が卵を産むとつまくヨシに隠すが、慣れてくると、どこにあるかわかるようになる。スッカンカラス、ヨシキリの事を私たちはスッカンカラスと呼んでいたが、スッ

カンカラスやヒバリの卵もとって食べていた。卵は水に入れてみて、浮かぶと雛になリかかっているから食べられない。沈んだものを食べていた。卵もない時代だったから。」

松原「昔は魚のテグスなんかはないし、馬のしっぽで輪を作つて罾を作つていた。そこにエサをまいておくと鳥が首を突つ込む、そうして鳥をとつていた。精米を出たくず米をもつてきてばらまいておく。そうしたらツグミ、スズメ、ハトがかかった。それをつかんで皮をむいて、骨がいつぱいあるもんで、開いて骨を金槌で叩いて砕いて、焼いて醤油をつけるとおいしかった。食べるものがなかったから、よくそんなことをしていた。河北潟でとったフナは醤油で炊いて食べていた。皆生臭いと思うみたいだが、自分はそんなに生臭いとは思っていなかった。そんなものしか食べられなかったから。フナとボラの小さいもの、私たちはイシゴイやアカメと言つていたが、そういったものやエビとかアメグリもよく食べていた。」

山名田「フナは食べると小骨がいっぱいあつて、骨がよく喉にかかった。ごはんといつしよに飲み込むと取れることもあつたが、とれないといつまでたつても痛い。だから大嫌いだった。」

昭和30年代は河北潟にウナギの稚魚を放流していて、養殖していました。漁業も盛んでした。この辺りの漁師は丸く船団を組んで投網漁もしていました。その頃は半農半漁ではなく漁業がメインでした。

長原「大崎に漁業組合があつてウナギもたくさん獲れていた。」

松原「ウナギは漁業組合に納める時は、生きたままでないと受け取ってくれない。死んだものは自分達が食べさせてもらえた。」

山名田「ウナギはもちろんおいしいんだけど、ナマズもおいしかったね。」

アカシヤランドの思い出

昭和40年代には「アカシヤランド」というレジャー施設がありました。遊園地に宴会場、風呂もあり、宿泊もできる施設でした。内灘砂丘に登るリフトもありました。アカシヤランドができたことで、内灘砂丘に登る道路もでき、海への移動が楽になりました。この頃、同時に大崎海水浴場もできました。

松原「当時は遊ぶところもないし、日曜日になつたらいっぱい人が来ていた。小さい遊園地もあって、潟に向かってジャングル風呂というお風呂もあった。」

長原「三二鉄道もあった。砂利道でも海には行けたけど、アカシヤランドに来たお客さんはリフトに乗って海水浴にいった。」

干拓前後の自然の変化

大崎区民会館のある辺りは、かつては田んぼでした。清水からきれいな水が流れてきていてホタルもいました。河北潟の方に行くと「ヨシ場」があり、そこにカイツブリやバン、ヨシキリもいました。

山名田「一番大きな変化は干拓してから、とった魚が臭くて食べられなくなったこと。以前は河北潟のものは何でもとってきたら食べていた。」

松原「前は汽水湖で海の水が入っていたから。今は海の水が入っていない。」

野田「海の水が入るとききれいになるといってもね。きれいな河北潟にもどればね。」

山名田「河北潟も海の水が行き来してきれいになれば、また使用価値はある。今のままでは全然。汽水湖になればいいけどなあ。」

長原「干拓地農業があるから難しい。」

松原「昔、大崎の辺りの河北潟の水は透明で底が見えた。ヨシが周りに生えていたのが水をもすぐ浄化していたんでしょ。水に含まれている栄養分を吸収して大きくなるから。またヨシ場を作らないとだめではないかと思う。今は周りの田ん

ぼからあまった肥料成分が潟へ流れてきているんじゃないか。」

大崎には砂丘から出るきれいな湧き水があり、清水と呼ばれています。これを利用する方法が期待されます。



大崎の小清水（ちっちゃしょうじ）。



小清水でみられる生きもの。

能登半島地震被害・復興

2024年1月1日に発生した能登半島地震により、大崎区内では液状化とそれに伴い地面が横に滑る側方流動が起き、家屋損壊、道路や地面に亀裂が入る等の大きな被害が出ました。地震発生後、大崎区民会館が避難所となり、発生当日は51人が会館に避難し、それから3週間、区民会館は避難所となっていました。電気はきていましたが、上下水道に大きな被害が出て、水道やトイレが使えない状況がしばらく続きました。避難所には、かほく市長が毎日訪れ、上下水道の復旧状況などを確認、説明をしていました。

山名田「水がなかった時には県外からも支援物資として、区民会館にペットボトルの水が何百箱と届いた。次から次へと補充してくれた。仮設の水道、仮設トイレもつけてくれて、とても助かった。」

避難者は、アパートや親戚宅など転居先を見つけた人たちから順次退所し、3週間後には5世帯ほどになり、その後は老人福祉センターに移り、アパートが見つかった人から順次移っていきました。最大で約60世帯が津幡や金沢に出て、避難生活をしていました。これまでに約30軒の家が解体されています。早い人は2024

年中に家を建て替え、2〜3軒はすでに入居しています。今も地盤改良をしたり、被害のなかった場所に移動したりして、4〜5軒新しく家を建てています。長く住んできた人にとっては愛着もあり、帰りたという人もたくさんいます。また能登から新しく転居してきた人もいます。一方で大崎に帰らない世帯も今現在30世帯あります。

震災前と変わらず住み続けられている家もあれば、解体せざるをえなくなった家、応急処置をして住み続けている家もあります。また側方流動で地面がずれてしまい、隣との境界がわからなくなったところもあります。状況が様々で、同じ地区でも考え方や思いに違いがあります。

山名田「高齢者が多いから、今更建ててもあと10年生きられるかもわからないのに、という人もけっこういます。」

野田「判断が難しい。家を建て替える人、直す人。避難しずとアパートにおけるわ、という人もいる。」

震災後、地区をどうするか、住民が集まり何度も話し合いを行っています。大崎では調査の結果、44ヘクタールで液状化対策が必要とされました。対策として地盤の強度を高める「地盤改良工法」と、地下水をポンプで排出して水位を下げる「地下水位低下工法」が挙げられています。国の試算では地盤改良法で200億円、地下水位低下工法で90億円かかります。どの工法にするか検討が進められています。

2024年の夏には立命館大学の学生が大崎を訪問し、地区の現状や歴史、自然をみながら大崎の復興計画を作る取り組みも行われました。

野田「学生さんの提案で入り江を作るというものがある。入り江を作って、地下水位低下工法の水抜きポンプの水もそこへ流すといい。」

長原「そこへ清水の湧き水も流せば、水が

きれいな場所ができる。」

山名田「それなら地下水位低下工法もいいかもしれない。」

松原「学生さんの提案に砂丘に登るエレベーターがあった。あれはいいなと思う。昔のアカシヤランドみたいで。」

山名田「ここは立山も白山もきれいに見える日が年に何日かある。それを見せればいい。」

区内にある榊原神社は、地震で大きな被害を受け、建物解体され、現在再建工事中です。再建には学生から出された再生案の一つ、神社内にコミュニティ広場を作るという提案が生かされています。話し合いながら、少しずつ復興が進んでいます。



立命館大学都市デザイン研究室・上山紗良さんが作った「大崎復興計画」



地震後の榊原神社（2024年1月6日）



再建がすすむ榊原神社（2025年3月）



地震後の大崎（2024年1月6日）



修繕された道路。建物などはまだこれからのものもある。（2025年3月）

河北潟流域で活動する人のお話

河北潟流域に関わる活動を
している人にお話を
伺っていきます。

川原さんは大阪の街中から河北潟にやってきて、環境保全活動を続けています。河北潟で毎年4月に開催される「河北潟クリーン作戦」では、実行委員会の事務局長をされています。子どもの頃の街中での思い出、河北潟へ来たきっかけ、クリーン作戦の運営にまつわるお話を伺いました。

土のない環境で育つ

生まれたのは兵庫県尼崎市で、幼稚園の途中で大阪に引っ越しました。住んでいた町はマンションや団地が多く、周辺はアルミサッシや鉄鋼業の工場がたくさんあるところでした。田畑はまったくなくて、土があるのは公園やマンションの植木くらいでした。家から歩いて10分くらいのところには大野川緑陰道路という歩行者・自転車専用道路があり、そこは並木が続いて草もあり、夏はセミが騒がしく、ヒヨドリやハトがいて、捨て猫や犬もいました。

父が自転車で出かけるのが好きで、一緒に行くうちに自転車で見回るのが楽しくなりました。小学生になって自転車に乗れるようになると一人で出かけるようになり、尼崎や十三など片道一時間くらいで行ける所はあちこち行きました。緑陰道路を走って自転車40分くらい進むと国道43号線にぶつかり、そこには石碑があり、「水害は忘れた頃にやってくる」と書かれていたのが印象に残っています。そこから国道を超えてさらに20分ほど進むと大阪湾に出られました。岸はコンクリートの堤防とテトラポット

かわはら ななえ

川原奈苗さん 豊かな自然、美しい風景のある河北潟を守りたい



川原奈苗さん:1978年兵庫県尼崎市生まれ、大阪育ち。河北潟湖沼研究所副理事長、河北潟クリーン作戦実行委員会事務局長。

で、砂浜は全くありません。ほとんど誰もいない静寂な空間で、友達と遊ばない日はここにきて、テトラポットから潮が満ち引きする様子を見ていました。片足がないハトがよくいました。捨てられた釣り糸で足が切れてしまったハトで、足の指が両足ともひとつもないのに歩いているハトもいました。自転車であちこちへ行くには、喉や目が痛くなり、手の平に鉄粉がたくさんついていました。だいぶよくなったとされる西淀川公害ですが、それでも洗濯物や外に置いてある洗面器の水に黒い粉がつかまりました。

学校へ行く時に川を渡るのですが、橋の上から水が渦を巻く様子を見るのが好きでした。潮が上がりつつある時は渦がすぐく、水面が下がると川底に捨てられている自転車やゴミが見えました。川一面、魚の死骸で覆われたこともあり、異様な光景でした。国道2号線が学校までのおもな通学路で、車に轢かれたり行き場のない犬や猫がよくいました。軽トラックに子犬を轢かれた野良の母犬がいて、軽トラックを見るたびに走ってタイヤにかみつこうとして最後は轢かれてしまい、どうすると良かったのかわかりませんでした。本来あるべき環境について考えるようになり、狭い所にたくさんの人がいるうえ、誰も自分の食べるものを作っていない、そうした自然が失われた環境に無理があると思う、こういう社会は何か変なのではないかと考えていました。

大阪から河北潟へ

そう考えながらも高校までは普通に過ごしていましたが、卒業後の進路を考えた時、自然環境の保護活動をしたかと思いましたが、調べると動植物の専門学校があり、そこへ進みました。生きものについて知識を得ることで、野生の動植物の生息空間として環境を守ることに大事だと思ふようになりました。それまで野生生物を見る機会が少なかった中で、見る目を養うために色々な調査活動に参加するようになりました。そのような中で、同じ専門学校の金沢校に通う人との交流をきっかけに、河北潟湖沼研究所と

つながりができました。

河北潟に初めて行った時の感想は、空と大地が広く、湖岸に植物のある風景が美しく、気持ちがいいところという事です。一番感動したのは、内灘砂丘を見た時でした。低地の向こうに小高い丘が一直線に続いて、その向こうに海がある、美しい独特の風景だと感じました。そして卒業して数日後に金沢に引っ越してきました。1999年です。

その頃、河北潟湖沼研究所が河北潟干拓地でピオトープ実験池を作っていたのですが、そこで水辺の生きものを調べることにしました。池には水草が植えられ、最初は水生生物もたくさん見られたのですが、そのうち水草がなくなり生きものも減っていききました。不思議に思っていると、ある時目の前でアメリカザリガニがアサザの葉柄を切りました。アメリカザリガニが切ったり食べたりしたせいで、水草がなくなっていたんです。生きものを守るつもりでも外来種がいると保全が難しい、一度なくなったものを再生することは簡単ではない、という事を実感した出来事でした。石川に来て一年ほどは色々な調査の仕事しながら河北潟の活動をしていましたが、河北潟の活動に専念していくことにしました。

河北潟クリーン作戦

同じ頃、河北潟クリーン作戦に参加するようになり、最初はいち参加者として内灘町の地点に参加しました。橋の下にバーベキューをしたゴミがまるごと捨てられていて、とても驚きました。その頃は金沢競馬場裏の湖岸がゴミ多くひどい状態でした。

クリーン作戦は当初、金沢市が事務局をしていましたが、2003年より金沢市からの要請で河北潟自然再生協議会が主催することになりました。そこから運営の手伝いをするようになり、チラシも作ったりするようになりました。その後クリーン作戦の規模が大きくなり、協議会だけでは主催が難しいことから、2018年から協議会に加え土地改良区などが構成員となる「河北潟クリーン作戦実行委員会」が主催となり、2022年から実行委員会の事務局長になりました。

ゴミ拾いイベントの難しさ

クリーン作戦の運営は、実行委員会だけでなく、2市2町(金沢市・かほく市・津幡町・

内灘町)と石川県にも協力いただいています。15年ほど前のクリーン作戦で、3人もケガ人が出たことがありました。その時の経験をともに事故のないクリーン作戦を目指して、様々な対策をとっています。特に当日の運営については、こうした関係者が一堂に集まり、真剣な話し合いを行っています。年度の変わり目で行政には異動もあるため、実施する直前の4月1日で担当者が変わることも多く、引継ぎが難しい場合もありました。そのような時、個別に説明の時間をとられると事務局の負担が大きく、行政の方も着任後すぐにわからないまま参加することの難しさがありました。事故のリスクも高まるので、対策として「引継書」を作り、それを年度内に渡して対応をお願いすることでスムーズに話が進むようになりました。

協力者・参加者のひろがり

実行委員会形式で開催するようになり、協賛を呼び掛けるようになってから、協力団体・企業の参加がひろがりました。2024年は能登半島地震により、ゴミ拾い実施場所でもいくつかの地点で被害がありました。参加者が安全に実施場所へ行くための道順や案内の表示など、行政の方との相談により対策を練ることができました。840人が参加し、事故もなく終わることができました。2025年から湖岸のゴミが多い場所に新しい地点の設置を予定していますが、ここでも様々な方に協力いただいています。

これからの河北潟

クリーン作戦が続けられてきた場所ではゴミが減っていることが写真をみても実感としてもあります。2市2町からいくつもの川が流れ込む河北潟は、まさに地域の鏡です。河北潟の利用者や住民をはじめ、クリーン作戦に参加する人が増え、1年に1度のゴミ拾いでほしいと思います。自然が残されている場所にゴミがなくなり、水草が生え、子どもたちが遊べるような水辺環境がとりもどされることを願って、これからも活動していきたいと思っています。

(聞き書き・番匠尚子/河北潟湖沼研究所)

河北潟流域新聞と一緒に作りませんか？

紙面づくりに参加いただける方を募集しています。河北潟流域の自然環境、環境問題、自然と人との関わり、生きもの等にご興味がある方、お待ちしております。ご興味のある方は河北潟湖沼研究所までお問い合わせください。

河北潟湖沼研究所
ホームページ

Instagram



X



Facebook

河北潟流域
ウェブサイトご感想
投稿ページ